

【姫路市立書写養護学校】の取組

1 テーマ

一人一人の「生きる力」を育む
～ R P D C A + T (Team Approach) で取り組む指導 ～

2 テーマ設定の理由

本校は重度重複障害のある児童生徒が多く在籍しており、その教育的ニーズに応じていくため、児童生徒それぞれの実態に合わせた目標や学習内容を設定し指導を行っている。本校の学校目標である「児童生徒の自立と社会参加に向けた生きる力を育む」を踏まえ、将来の社会参加に向けたキャリア教育という観点を重視し、この研究テーマを設定した。

- ・肢体不自由児を対象にした学校という特性上、教員がチームで動く場面が多く、児童生徒への指導においても、チームアプローチが欠かせない。
- ・R（実態把握）P D C Aサイクルでの授業づくりの実践を通して、多角的な視点から児童生徒の実態を捉えて把握し、指導の中心となる課題の整理をしながら、個に応じた自立活動や教科学習の指導について研究を進めてきた。

3 研究経過

(1) 1年次（令和2年度）の取組

1年次は自立活動での研究を進めるため、児童生徒の実態把握やそこからの中心課題の抽出、チームでの指導・支援などについて理解を深める必要があると考えた。

- ・校内で使用する「課題関連図」や「手順シート」についての研修を実施した。
- ・授業や生活場面での子どもの様子をグループの教員で多角的に観察・情報共有を行うことで、きめ細やかな実態把握を行い、指導内容やアプローチの工夫へとつなげた。
- ・さまざまな学部の教員が協同して学びを深めるため各学部の教員を縦割りにした研究部会を編成して事例研究を行った。

<研究計画>

	日時	内容
研究部会①（R + P）	7月27日（月）	実態把握およびテーマ検討
研究部会②、 ルネス全体研修（D + C）	10月9日（金）	現状報告、療法士より指導助言、 手立て検討、療法士より講演
研究部会③	12月16日（水）	現状報告、手立て検討、指導案検討
公開授業（一木薫教授来校） 第1回校内研修会	12月18日（金）	公開授業、講師より指導助言、 講師より講演
公開授業（橋詰和也先生来校） 第2回校内研修会（A + C）	1月28日（木）	公開授業、講師より指導助言、 講師より講演
研究部会④（P）	2月3日（水）	公開授業反省、手立て再検討、 1年のまとめ

- ① 研究部会では代表児童生徒の実態把握を行った上で、ルネス花北の専門職員と連携しながら3つの部会を設定した。各部会のテーマは以下のとおりである。
- PT部会：目的を明確にした動作課題への取り組み
 OT部会：コミュニケーションにつながる動作支援のあり方
 ST部会：主体的なコミュニケーション支援について
- ② 第1回校内研修会では、福岡教育大学の一木薫教授を講師として招き、教科・領域を合わせた指導として行っている生活単元学習（小学部）の授業を公開し、特別支援学校学習指導要領において、教科・領域を合わせた指導がどのように位置づけられているかを確認した。
- ・本校において各教科が目指す子ども像を明確にイメージして、そのために必要な力をより自然に学ばせるために複数の教科・領域を合わせた指導が有効であること。
 - ・講演からは、子どもの実態把握から中心課題をしぼって、指導目標や学習内容を設定する方法や、そのポイントについてご指導いただいた。
 - ・自立活動という教科書のない指導領域において、子どもの具体的な目標や手立てを設定するための道筋を確認することができた。
- ③ 第2回校内研修会では、武庫川女子大学の橋詰和也教授に講師を依頼した。各部会において、事例にあげた子どもの自立活動の授業を公開して、指導助言を受けた。コロナ禍での研修であったため、事前に授業の様子をDVDに収めて送付し、リモートで指導を仰ぐこととなった。
- ・実際の動画を見ながら、子どものひとつひとつの様子を取り上げて、そこから読み取れる発達段階やつまづいているポイントの解説を聞くことで、子どもの実態把握をする際の着眼点を整理することができた。
 - ・キャリア教育とは、児童生徒のキャリア発達を促す教育である。人生をどう生きるかを学びそれを実現させるために必要な知識や経験を得るものであり、今後の主体的な学びを育む授業づくりの基盤として、個々の実態を発達という見方・考え方から捉える意義を学んだ。

(2) 2年次（令和3年度）の取組

1年次の縦割りでの自立活動における事例研究を引き続き行い、観察力や指導力の向上を図った。また、自立活動の目標が教科学習の目標の基礎となっていることから、自立活動だけでなく各教科・領域を合わせた指導にも研究をつなげるため、年間指導計画から指導内容の分析、整理を行い、各学年で取り扱う教科書や検定本を用いた「共通教材」の整備を行うことで、教科学習においても系統性、継続性のある指導を目指した。

<研究計画>

	日時	内容
研究部会①（R＋P）	5月28日（金）	実態把握およびテーマ検討
研究部会②（D＋C）	7月28日（水）	現状報告、手立て検討
研究部会全体研修会	8月19日（木）	福岡教育大学一木薫教授より講演
研究部会③・ルネス全体研修会（A＋C）	10月8日（金）	現状報告、療法士より指導助言、ルネス全体研修

研究部会④（P）	10月21日（木）	研究授業学習指導案検討
県肢研自立活動部研修会 （研究部会全体研修会を 兼ねる）（D+C）	12月13日（月）	研究授業公開 兵庫教育大学大学院石倉健二教授より指導 助言
研究部会⑤（C）	12月17日（金）	公開授業反省、手立て再検討
研究部会⑥（A+P）	2月10日（木）	1年のまとめ、ふりかえり

① 研究部会では代表児童生徒の実態把握を行った上で、各部会のテーマを以下のとおり設定した。

P T①部会：様々なからだの学習から目標にアプローチする

P T②部会：主体的な動きを引き出す姿勢作り

O T部会：主体的な活動につながる上肢の動作課題への取組

S T部会：主体的なコミュニケーション支援について

② 第1回研究部会全体研修会では、福岡教育大学の一木薫教授に「自立活動の指導における実態把握から指導目標・内容の設定」というテーマで指導を仰いだ。

- ・自立活動の意義と指導の基本や、各教科と自立活動の指導の関連など、基本的知識についておさえるだけでなく、児童生徒の発達 of 諸側面の相互作用にも触れて、より実践的な内容であった。

- ・児童生徒の事例を2例あげ、児童生徒の実態把握から自立活動の課題を解決するため、「課題関連図」の実技を職員全体で行った。

- ・グループで児童生徒の課題を検討することで、具体的な疑問点や作成する際の教師の課題が見え、本校の課題関連図や、自立活動の手順を記す「手順シート」の書式や作成方法の改善につながった。

③ 第2回研究部会全体研修会では、兵庫県特別支援学校肢体不自由教育研究協議会の自立活動部会研修会と校内研修会を兼ね、本校の研究体制や自立活動の取組について県下肢体不自由校へ発信するとともに、各研究部会の授業公開を行い、兵庫教育大学大学院の石倉健二教授から指導助言を受けた。

- ・当日の授業や事前送付したDVD動画の様子から読み取れる、児童生徒のひとつひとつの様子を取り上げて、発達段階についての解説や、教師のよりよい支援・取組へのアドバイスをいただいた。

- ・児童生徒の実態把握をする時の着眼点や、授業を組み立てたり改善したりする際に効果的なアイデアを学ぶことができた。

- ・「入学から卒業までを見通した自立活動の系統的な指導」というテーマで、児童生徒の育ちの系統性を理解した上で実態把握を行い、指導の系統性・一貫性を担保することの大切さについて指導を受けた。

（3）3年次（令和4年度）の取組

2年次の自立活動から、教科学習にも研究を広げた。授業研究では、国語と音楽について縦割りの班を編成して事例を挙げ、教師間で子どもの情報共有を行うとともに、4学部間で意見を出し合いながら授業研究を行う体制作りを進めている。

< 研究計画 >

	日時	内容
研究部会① (R + P)	5月 6日 (金)	実態把握および指導内容検討
研究部会② (D + C)	5月 31日 (火)	指導案検討
第1回校内研修会 < 県肢研 > (D + C)	6月 29日 (水)	教科部会公開授業1回目 福岡大学徳永教授より指導助言・講演
研究部会③ (C + A + P)	7月 8日 (金)	手立て再検討
研究部会④ (D + C + A + P)	10月 7日 (金)	現状報告、手立て再検討
研究部会⑤ (D + C)	12月 21日 (水)	自立活動部会公開授業 校内にて事後検討会
研究部会⑥ (D + C)	2月 3日 (金)	指導案検討
第3回校内研修会 (校内 研究発表会) (D + C)	3月 1日 (水)	教科部会公開授業2回目 福岡大学徳永教授より指導助言・講演

- ① 研究部会では代表児童生徒の実態把握を行った上で、各部会のテーマを以下のとおり設定した。

教科部会A：言葉のおもしろさにふれるアプローチの仕方

教科部会B：子どもの気付きや表出を活かした音楽活動

自立活動部会A：情緒を安定させ、主体的に取り組ませるための支援

自立活動部会B：本人の得意を活かした自立への指導

- ② 教科部会A・Bの授業を公開し、福岡大学の徳永豊教授より指導助言を仰いだ。単元全体の目標は、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点を踏まえて適切に定めることができていたこと、児童生徒の実態を踏まえて個別に目標を立て、全体の流れが整理されていたことは評価していただいた。
- ・教科部会A（国語）では、児童がどのように働きかけに応じているのかを確認（評価）するタイミングをこまめに入れることが大切であること。
 - ・教科部会B（音楽）では「主体的な活動につながりにくい生徒に対しては、活動や支援を細かい段階に分けて捉え、生徒が手を動かすことで音が鳴ったという体験を積み重ねることで、行動と結果の結びつきに気付かせ、活動意欲を育てることが大切であると指導を受けた。
 - ・講演、「学び」をみていく「ものさし」として学習指導要領や学習到達度チェックリストなどを活用する大切さ、目標設定の手掛かりとなる行動を次の段階意義から検討・協議し、個々の発達段階に合わせて適切な目標設定をしていく必要性などを学んだ。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・3年間の研究の中で、教員の中に「チームで取り組んでいく」という意識が根付き、学習集団での情報共有や協議、教材の相談などが行われるようになった。学部を越えて1人の子どもの課題や手立てについて話し合いを進めた。
- ・学校全体で児童生徒に関わる意識が高まり、子どもの小さな頑張りや成長を見逃さない誰もが安心して通える学校の雰囲気につながった。
- ・縦割りグループでの研究部会では、それぞれの学習集団から授業に関して多角的な意見を出し合ったり、お互いの実践例について発表したりして、それぞれの学習集団で活かせる知識やアイデアを共有することができた。
- ・児童生徒の実態をさまざまな視点から捉えて把握するために、実態把握表や学習到達度チェックリストを用いたり、児童生徒の課題の整理のために課題関連図や教科情報整理シートなどのツールを活用したりしながら個に応じた自立活動や教科学習の指導を目指して教育実践に取り組む体制が整ってきた。

(2) 課題

- ・年度によって重視する自立活動と教科学習のどちらの研究に重きを置くかを変更していたことで、それぞれの研究成果を翌年度に振り返る機会を十分に設定することができなかった。
- ・本校の経験年数の若い教員の中には、直接研究に触れていない者も多く、これまでの成果を教員間で共有していくことがスキルアップのために求められている。
- ・実際に研究に参加した教員も、学んだ内容について自身で実践し、そこから自分たちで使えるスキルに高めていくことで児童生徒の実態に合った指導に生かされる。自立活動においては、児童の実態把握や、課題の整理といった成果を経験年数の多い教員が中心となって伝えていける機会の設定が必要である。
- ・教科学習の指導においては、国語科や音楽科の専門的な知識も高めるために、教員間での授業へのアドバイスや意見交流といった教員同士の学び合いの機会も必要である。
- ・今後も教育実践に基づく研究が進められるように、実践記録の保存や共有方法の整理・確立、学習集団で協議を行う場の確保などについても取り組む。

5 参考文献

慶應義塾出版会 発行 一木薫著

特別支援教育のカリキュラム・マネジメント：段階ごとに構築する実践ガイド

ジアース教育出版 発行 古川勝也・一木薫編著

自立活動の理念と実践

慶應義塾出版会 発行 徳永豊著

障害の重い子どもの目標設定ガイド 第2版 授業における「Sスケール」の活用